京都国立博物館だより

二〇一六年 一・二・三月号

KYOTO NATIONAL MUSEUM

2016 January to March vol.189

新春特集陳列
さるづくし

特集陳列
刀剣を楽しむ

特集陳列
獅子と狛犬

特集陳列
皇室ゆかりの名宝

特集陳列
雛まつりと人形

新春特集陳列

さるづくし
―干支を愛でる―

平成27年12月15日（火）～平成28年1月24日（日）
【平成知新館　2F―1～5】

年末年始の京都国立博物館では、平成二十八年（二〇一六）の幕明けを祝して、新年の干支である申（さる）にちなんだ特集陳列を開催いたします。日本や東洋の絵画・工芸品に数多く表されてきたバラエティ豊かな猿たち。彼らが平成知新館の二階に集まります。

猿は、他の動物と同様に、神仏とのつながりをもつ獣として宗教美術に表されてきました。とくに日本では、日吉大社の使いや、青面金剛を本尊とする庚申信仰において今日でも神聖な存在とされています。また、京都を代表する民俗芸能のひとつである壬生狂言では、室町時代から江戸時代にかけて、人が猿の扮装をして曲芸を披露する演目が行われていました。おそらく、それは猿の霊力に期待して始められたものと考えられます。本展示では、そのころの壬生狂言に使われていたと考えられる猿の面を含む「壬生三面」を、壬生寺より特別にご出陳いただきます。

一方で、猿が私たちの笑いを誘うような滑稽な性格をもつことも見逃せません。猿や十二支の動物たちが人間の格好をして歌合や舞を楽しむ「十二類絵巻」は、遊び心あふれる絵と言葉で私たちを楽しませてくれます。芸能においても、時代が下るにつれて壬生狂言などは娯楽化がすすみ、また、猿回しなどの演芸も発達しました。絵に描かれた猿回しの姿もご紹介します。

さて、鎌倉時代以降、中国から禅宗が本格的に入ってくると、同時にその教えを表現した水墨画も日本で受け入れられるようになります。そこに描かれた猿は、大陸の南方に棲息するテナガザルでした。ことに中国の画僧牧谿が描いたテナガザルを中世の日本人は愛し、しばしば自身の作品に描きました。こうしたいわゆる「牧谿猿」は、中世絵画の部屋にたくさん登場します。とくに、彼らが金色の光だよう山間に群れ遊ぶ姿を描いた「巌樹遊猿図屏風」は、目玉作品のひとつです。

江戸時代、京都を中心に活躍した個性的な絵師たちも、猿の絵を多く残しています。伊藤若冲、曾我蕭白、長沢芦雪といった、今日ではたいへん人気となった絵師のほか、禅僧・白隠や、京狩野の祖・狩野山楽など、さまざまな身分の絵師が描いた「猿」をご覧ください。

その中でも注目すべきは、猿の絵の名手と謳われた森狙仙。彼が描く、生命感にあふれ親しみ深い表情をみせる猿の絵は、大坂を中心にたいへんな好評を博しました。毛の一本一本まで細やかに描かれた狙仙の作品を、じっくりとご鑑賞ください。

このように、時代を通じてさまざまな作品に表されてきた猿ですが、最後に、日常生活の中で用いられた工芸品や、吉祥の意味をこめて床の間などにかけられた掛幅のなかの猿をご紹介します。洗練されたデザインの漆工品や根付は、現代の私たちの目をも驚かせてくれます。

日本人が尊び愛でてきた猿という動物。美術のなかに表れた彼らの姿やかたちを、年末年始の当館で是非お楽しみください。

（井並林太郎）

重要文化財　巌樹遊猿図屏風　式部輝忠筆　京都国立博物館

重要文化財　十二類絵巻　巻上　部分

猿蟹図　伊藤若冲筆

梅猿猴蒔絵硯箱
京都国立博物館

猿根付　線刻銘「正直」
京都国立博物館

三猿緒締　線刻銘「懐玉」京都国立博物館

日吉山王垂迹曼荼羅図　京都当道会

群猿・唐子図屏風のうち群猿図　長沢芦雪筆

猿図絵馬　森狙仙筆　兵庫・柿本神社

特集陳列「獅子と狛犬」【平成知新館　1F―5】より

狛犬あれこれ

狛犬は児という中国の空想上の動物が起源とする説がありますが、漢時代の青銅製の児はサイに似た太ったからだで、日本の狛犬とはまったく似ていません。むしろ獅子と差がないので日本では角のある獅子と解釈されていたのではないかと思います。

獅子は言うまでもなくライオンのこと。インドにもかつては広範囲にライオンがいたそうですが、インド、東アジアでは虎も強い獣として身近な存在です。なぜ虎ではなくライオンが社寺に一対で置かれるようになったのでしょうか？

ライオンを神殿や墓などの守護獣として置く例に、エジプトのスフィンクスがあります。顔は人間、からだが獅子のスフィンクスは中東のアッシリアでは立った姿の一対で入口の両側に表されました。こうした風習がインドに伝わったのでしょう。仏陀の像の両脇にライオンが置かれるようになりました。仏陀の説法の堂々とした姿を評して獅子吼と例えることがあります。ライオンは百獣の王として畏敬される存在でもあったのです。仏教における獅子は文殊菩薩の乗り物であり、仏涅槃図では仰向けになって仏陀の死を嘆く獅子が描かれます。

ライオンと同じくらい強い虎は守護獣にはなりません。仏涅槃図に虎が登場することは少なく、また獅子のようには悲しみを表しません。羅漢図に描かれることが多く、それは悟りを開いた羅漢が虎を手なずける様子を示しています。虎は猛り狂う煩悩の象徴で、「悟り」とは煩悩を鎮め、コントロールできるようになることなのです。ライオンは群れを作り、虎は単独で行動します。そこに両者の扱いの差の原因があるのかもしれません。

ネコ科のライオンが狛犬と呼ばれるのも変ですが、顔を見ると鼻や口が突き出ていて犬に近いでしょう。眉があるのは中国の唐獅子から受け継いだもので空想の産物だからです。

中には首に鈴を着けているものもあります。野生ではなく神仏に奉仕する獣であることを示すしるしと考えられます。（浅見龍介）

狛犬〈峰定寺伝来〉
京都国立博物館

特集陳列

刀剣を楽しむ
―名物刀を中心に―

平成27年12月15日(火)～平成28年2月21日(日)
【平成知新館　特別展示室】

王城の地・京都では、平安時代から江戸時代まで多数の刀工が工房を構え、数々の名刀を生み出してきました。そして、それぞれの時代に造られた刀達は時代を超え、さまざまな歴史の場面に立会ったのです。

この特集陳列では、京都の古社寺に伝来した名物刀の全てを一挙公開し、数奇な運命に翻弄されながらも時代を生き抜いた名刀の数々を紹介いたします。

史上初となる源氏重代の宝刀、「髭切」（「太刀　銘国綱」重文、北野天満宮）・「膝丸」（「太刀　銘□忠」重文、大覚寺）の同時出陳を筆頭に、後鳥羽上皇御自ら作刀し、菊花文を刻んだことで菊の御紋の端緒となった「太刀　菊御作」（重文、京都国立博物館）、御番鍛冶筆頭の栄誉を受けた一文字派の祖・則宗の傑作で、足利尊氏佩用の「太刀　銘□前国則宗（名物二ツ銘則宗）」（重文、愛宕神社）を展示します。當麻寺に属し、古都大和を代表する名門鍛冶・當麻派の名品「短刀　無銘（名物上部當麻）」（重美）、桶狭間の戦いで織田信長が今川義元より獲得した「刀（名物義元左文字）」（重文、建勲神社）、斬りつける真似をするだけで相手の骨が砕けるという伝説を持つ「薙刀直シ刀（名物骨喰藤四郎）」（重文、豊国神社）、豊臣秀吉が絶賛した天下三作の一人にして短刀の名手、藤四郎吉光の手による「短刀　銘吉光（名物秋田藤四郎）」（重文）、近代日本の扉を開き、幕末の京都を駆け抜けた坂本龍馬の愛刀「刀　銘吉行」（京都国立博物館）など、ドラマティックな歴史とあわせて、奥深い刀剣の美の世界をお楽しみください。

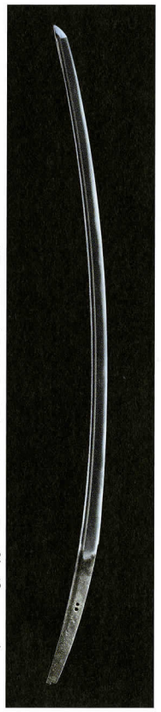
刀達の物語る声が皆様の耳にも届くことでしょう。

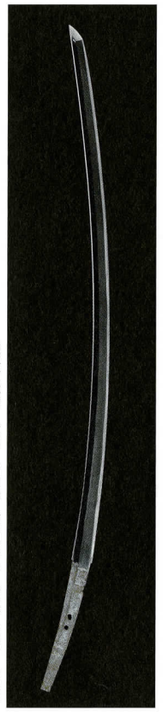
（末兼俊彦）

重要文化財　短刀　銘吉光（名物秋田藤四郎）

重要文化財　刀　金象嵌銘永禄三年五月十九日義元討捕刻彼所持刀／織田尾張守信長（名物義元左文字）　京都・建勲神社

重要文化財　薙刀直シ刀　無銘（名物骨喰藤四郎）　京都・豊国神社（12月15日～1月17日展示）


太刀　銘国綱（名物髭切・鬼切）　京都・北野天満宮（12月15日～1月17日展示）


重要文化財　太刀　銘□忠（名物膝丸・薄緑）　京都・大覚寺

特集陳列

皇室ゆかりの名宝

平成28年1月26日(火)～2月21日(日)
【平成知新館　2F―1～5】
【関連展示　1F―3・4・6】

平安京遷都から千年、帝のおわす京の都は文化と伝統の中心地でした。宮中を中心とした華やかな王朝文化が花開き、その結果、書画・彫刻・工芸品に至るまで静謐で格調高い数多の名宝が生み出されたのです。この特集陳列では、京都が生み出し、守り続けた名宝の数々をご覧いただきます。

はじめに「後宇多天皇像」（重文、大覚寺）など、王朝文化に深いかかわりを持つ歴代天皇の姿や、王朝に仕えた公家たちを描いた「公家列影図」（重文、京都国立博物館）から、当時の文化の担い手であった人々の実像に迫ります。

つづいて、公家ゆかりの寺院、とりわけ皇子女や摂家の子女が入寺し、高い格式を誇った門跡寺院に伝わる作品をご紹介します。博物館の東に位置する智積院所蔵の「孔雀明王像」（重文）、霊雲院を飾った障壁画「四季花鳥図」「琴棋書画図」「月夜山水図」（重文）から、今なお残る宮廷文化の余風を感じてください。

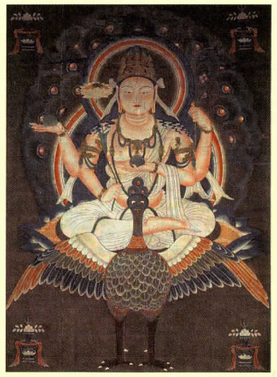
寛永三年（一六二六）徳川秀忠・家光親子の招きに応じ、後水尾天皇が二条城に行幸する様子を描いた「二条城行幸図屏風」、文久三年（一八六三）に孝明天皇が攘夷祈願のため上賀茂神社と下鴨神社に行幸する姿を画題とした「賀茂行幸図屏風」は、歴史の一場面を目にしたような気持ちにさせることでしょう。

また、四季折々の宮中の生活で用いられた宮廷の装束や、宴を彩った漆の器といった工芸分野の作品からは、当時の儀礼や生活の姿が垣間見えます。さらに、日本の文化人が範を求めた中国・文人皇帝の代表格、高宗の名筆「楷書徽宗文集序巻」（国宝、文化庁）など、海外の皇帝による至高の作品と、天皇自身の御手が生み出した雅なる宸翰の世界をお楽しみください。

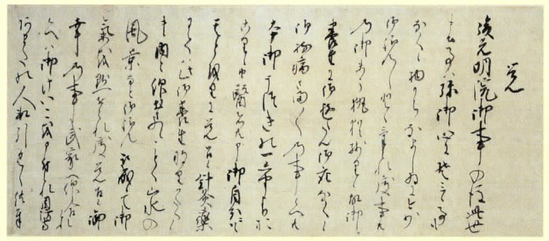
（末兼俊彦）

重要文化財　後宇多天皇像　京都・大覚寺

二条城行幸図屏風　右隻　部分


重要文化財　孔雀明王像　京都・智積院

国宝　松椿蒔絵手箱　京都国立博物館
（1F－6にて展示）


後水尾天皇宸翰覚書　部分　京都国立博物館（1F－3にて展示）

平成知新館 名品ギャラリー〈12月15日より〉

※●マークは特集陳列「皇室ゆかりの名宝」関連展示です。

3F－1　陶磁
【日本と東洋のやきもの】
1月2日(土)～3月13日(日)

3F－2　考古
【日本出土の考古遺物】
1月2日(土)～3月13日(日)

2F－1～5
【新春特集陳列　さるづくし―干支を愛でる―】
12月15日(火)～1月24日(日)

2F－1　絵巻
【特集陳列　皇室ゆかりの名宝】
1月26日(火)～2月21日(日)

2F－1　絵巻
【福富草紙とおとぎ草紙絵巻】
2月23日(火)～3月21日(月・祝)

2F－2　仏画
【彼岸と浄土】
2月23日(火)～3月21日(月・祝)

2F－3　中世絵画
【山水図を楽しむ】
2月23日(火)～3月21日(月・祝)

2F－4　近世絵画
【花と鳥のパラダイス】
2月23日(火)～3月21日(月・祝)

2F－5　中国絵画
【須磨コレクションの画帖・画巻・扇面画】
2月23日(火)～3月21日(月・祝)

1F－1　彫刻
【日本とアジアの彫刻】
【地蔵と十王像】
12月15日(火)～3月21日(月・祝)

1F－2　特別展示室
【特集陳列　刀剣を楽しむ―名物刀を中心に―】
12月15日(火)～2月21日(日)

【特集陳列　雛まつりと人形】
2月27日(土)～3月21日(月・祝)

1F－3　書跡
【かなの美と和歌】
12月15日(火)～1月24日(日)

●【雅なる近世天皇の書】
1月26日(火)～2月21日(日)

【日記・記録】
2月23日(火)～3月13日(日)

1F－4　染織
【染織の文様―吉祥―】
12月15日(火)～1月31日(日)

●【宮廷の装束】
2月3日(水)～3月13日(日)

1F－5
【特集陳列　獅子と狛犬】
12月15日(火)～3月13日(日)

1F－6　漆工
【宴を彩るうるしの器】
12月15日(火)～1月31日(日)

●【皇室と門跡寺院にゆかりの調度】
2月2日(火)～3月13日(日)

特集陳列

雛まつりと人形

平成28年2月27日(土)～3月21日(月・祝)
【平成知新館　特別展示室】

春の訪れとともに、本年もまた雛の節供がめぐってきます。京都国立博物館では、恒例の特集陳列「雛まつりと人形」を開催します。

三月三日の雛まつりの起源として広く知られているのが、上巳の節供という、三月のはじめに行われた禊の行事です。人間の形代として用いられた人形は、人間の穢れを引き受ける存在であり、廃棄されるものでした。

これが座敷に飾って楽しむ雛人形へと変化した背景として、江戸時代の初め、三月三日を中心に、武家や公家の女子の間で盛大に執り行われた「ひいな遊び」という、おままごとや人形の贈答を伴う祝宴の存在が、近年指摘されるようになりました。

形代として川に流されていた簡素な人形と、上流階級の贈答に用いられた凝ったつくりの人形が結び付き、座敷に飾って楽しむ雛人形が誕生したのです。

こうして誕生した雛人形は、時代の好みに応じて、変化していきました。中には、寛永雛や享保雛のように、それぞれ寛永年間（一六二四～四三）、享保年間（一七一六～三五）を中心に流行したと考えられ、元号を冠して呼ばれる雛人形もあります。そのほかにも、次郎左衛門雛、古今雛、有職雛など、江戸時代の雛人形は一様ではありません。面差しや装束など細部に注目し、それぞれの雛人形の特徴を考えるのも一興でしょう。

また当館では毎年、京都を中心に上方で流行した、豪華な御殿つきの雛段を展示しています。現代では見られなくなった上方特有の雛飾りは、当館の雛まつりを象徴する作品です。

雛人形のほかにも、豊かな人形文化をもつ日本には、各種の人形を見ることができます。公家を中心に贈答用に用いられたという、御所人形や賀茂人形。市井の風俗を写した衣裳人形。ゼンマイなどの動力を用いたからくり人形。これほど多種多様な人形は、江戸時代の暮らしの中で、どのように受けとめられていたのでしょうか。

近年、大掛かりな雛段のみならず、飾り人形を家庭で目にする機会も、少なくなってきました。このたびの展示が、日本人が慈しんできた人形文化について、改めて想いをめぐらすきっかけになれば幸いです。

（山川　曉）

古今雛　京都国立博物館

御殿飾り雛

よみもの

目指せ、博物館学派

京都国立博物館副館長　伊藤嘉章

平成二十七年秋、京都国立博物館は琳派展で大いに賑わっておりました。江戸美術の特色のひとつに「分かりやすく綺麗」ということがあります。「分かりやすい」と言ってもレベルが低いというのではありません。誰しもが入っていけるということです。琳派の美術は、まさに誰もが楽しむことができるものであり、そして奥行の深いものです。だからこその琳派展の賑わいであり、そうした琳派展を見ながら思う所がいくつもありました。その最大のものが「目指せ、博物館学派」です。

今回の琳派展で、仁清の茶壺が出品されていました。この作品を出品する案が示された時に、絵画の研究者から「乾山は分かる。どうして仁清？」という声が上がりました。尾形光琳の弟、乾山の作品なら分かる。どうして仁清が琳派なの、という疑問です。この展覧会をご覧いただいた皆様であれば、この疑問を不思議なものと思われたことでしょう。会場で仁清の「色絵芥子文茶壺」（重要文化財　出光美術館蔵）が部屋の中央に飾られ、その背後には京都国立博物館の「芥子図屏風」がありました。その二つは溶け合うような見事なハーモニーを生み出しておりました。

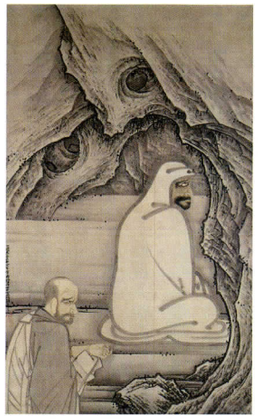
仁清は狩野派風の絵で飾る「色絵月梅図茶壺」（重要文化財　東京国立博物館蔵）もありますが、今回の芥子の茶壺のように琳派風の絵によって飾られた茶壺も作っています。絵画で当たり前のことを陶磁の人間が知らないこともあるように、陶磁の世界では知られている仁清の琳派風の表現が絵画の世界では知られていなかったということです。

琳派展にもどりましょう。琳派、とりわけ工芸の盛んであった京の琳派の世界では、美術と工芸の世界とがひとつとなっていました。光悦は書を書き、漆を作らせ、茶碗を作る。光琳は絵を描き、漆を作り、染織のデザインを行う。乾山は陶器を作り、絵を描く。絵画では、工芸意匠に見られるような大胆な省略が使われ、見る者の心をつかんでいく。

日本では明治初年に西洋美術の概念が入ってくるまで、「美術」と「工芸」とを明確に区別することはありませんでした。それを現在のわれわれは、専門という名のもとに、「工芸」の「陶磁」の「日本陶磁」の…と細分化しながら自らの世界を作ってしまい、工芸と美術の世界も別々に考えてしまいがちです。

さて、博物館学派です。我々博物館の人間は、展示という素晴らしい仕事があります。展示することで、例えば先ほどの仁清の茶壺が琳派の屏風とシンクロする世界を自ら感ずることができるのです。そしてそれぞれの専門領域を持つ者同士が、そうした作品の前で語り合うことができる。これぞ作品を実際に扱う博物館ならではの醍醐味なのです。

接写レンズと広角レンズを合わせ持つ。自身の専門領域では深く、そして日本美術という所ではそうした領域を越えて見ていける。そんな「博物館学派」を目指したいという思いを強くしたのでありました。


国宝　慧可断臂図　雪舟等楊筆
愛知・齊年寺

国宝　無準師範像　自賛
京都・東福寺

重要文化財　大仙院障壁画のうち四季花鳥図　狩野元信筆　京都・大仙院

特別展覧会

臨済禅師1150年・白隠禅師250年遠諱記念

禅―心をかたちに―

平成28年4月12日(火)～5月22日(日)【平成知新館】

歴史の教科書などでもおなじみの「禅宗」は、いまからおよそ一五〇〇年まえ、菩提達磨によってインドから中国に伝えられたといわれ、わが国へは鎌倉時代にもたらされました。武家のみならず、天皇家や公家、さらには民衆にまで広く流布し、日本の社会と文化にじつに大きな影響を与え、最近では欧米でも徐々に人気を博しています。

その一派である臨済宗および黄檗宗は、中国の臨済義玄（？～八六六）という禅僧を宗祖とします。今年は、臨済義玄の没後一一五〇年、さらに日本における臨済宗中興の祖である白隠慧鶴（一六八五～一七六九）の没後二五〇年の遠諱法要が行われます。これを記念して、「禅―心をかたちに―」と題する特別展覧会を開催いたします。

禅宗にあっては、たとえば「以心伝心」や「不立文字」が語るように、師から弟子へ教えを伝えるのに言葉や文字を必要とせず、心から心へと連綿と受け継がれてきました。こうした祖師や先師たちの教え＝「心」を「かたち」＝美術にまで昇華した禅の奥深さ、あるいは禅宗が中国で興ってから、日本にどのように伝わり、国内でいかにして広まり、どのような影響を及ぼしたのかをより立体的に紹介する試みです。

現在、臨済宗と黄檗宗には十五の本山があり、その全面的な協力のもと開催するため、禅僧の肖像画や墨蹟、彫刻、書画や工芸など、一度は耳にしたことのある多彩な名宝の数々にきっと出会えることでしょう。会期中の展示替えをふくめると、全体で二二〇点ちかくの作品が展示され、その半数以上が国宝や重要文化財、つまり国の指定品という質量ともにかつてない規模の展覧会となります。

これらを「禅宗の成立」・「臨済禅の導入と展開」・「戦国武将と近世の高僧」・「禅の仏たち」・「禅文化の広がり」の五章に分けて展示いたします。この機会に、多くの方々に禅の神髄に触れていただきたく思います。

（羽田　聡）

国宝　禅院額字并牌字のうち「大円覚」　無準師範筆　京都・東福寺

青磁碗　銘雨龍　京都・鹿苑寺

国宝　瓢鮎図　部分　大岳周崇等三十一僧賛　如拙筆　京都・退蔵院

重要文化財　椿尾長鳥文堆朱盆　京都・興臨院

十八羅漢像のうち羅怙羅尊者　京都・萬福寺

表紙：重要文化財　巌樹遊猿図屏風　左隻　部分　式部輝忠筆　京都国立博物館

土曜講座

1月 9日　土曜講座1800回記念「冷泉家の年中行事」
公益財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長 冷泉為人氏

1月16日「刀剣を楽しむ―名物刀を中心に―」*
京都国立博物館研究員 末兼俊彦

1月23日「猿へのまなざし―申年にちなんで―」*
京都国立博物館研究員 井並林太郎

1月30日「唐物天目―種類と価値観―」
京都国立博物館研究員 降矢哲男

2月 6日「行幸行列図を読む」*
京都国立博物館研究員 福士雄也

2月13日「典雅なる装い―京都国立博物館所蔵　宮廷装束コレクション―」*
京都国立博物館教育室長 山川　曉

2月20日「科学機器による仏像の調査研究」
京都国立博物館上席研究員兼企画室長 浅見龍介

2月27日「京の雛飾りの特色と変遷について―ひいな遊びからひなまつりへ―」*
平等院ミュージアム鳳翔館学芸員 田中正流氏

3月 5日「みちのくの経塚遺宝―秋田県松岡経塚をめぐって―」
京都国立博物館列品管理室長 宮川禎一

3月12日「教育普及の仕事―ものと人との橋渡し―」
京都国立博物館研究員 水谷亜希

3月19日「国宝　山越阿弥陀図の謎を探る」
京都国立博物館保存修理指導室長 大原嘉豊

*…特集陳列関連講座
※平成知新館 講堂にて、午後1時30分～3時に開催。定員200名、聴講無料（ただし観覧券等が必要）。
※当日12時より、平成知新館1階グランドロビーにて整理券を配布し、定員になり次第、配布を終了します。

イベント

《新春イベント》

○親子で餅つき大会　※雨天中止。数に限りがありますので、ご了承下さい。
日時：2016年1月2日（土）午前10時～11時30分　場所：庭園

○福引抽選会　※景品がなくなり次第終了となります。
日時：2016年1月3日（日）午前9時30分～午後4時　場所：平成知新館グランドロビー

○芸舞妓　春の舞
日時：2016年1月10日（日）・11日（月・祝）両日とも午後1時～、2時～（各回約30分）
場所：平成知新館グランドロビー

○トークイベント「見る、感じる―在りし日のもの語り」
日時：2016年1月17日（日）午後1時30分～3時30分　会場：平成知新館 講堂
登壇者：葉室麟氏（小説家）、山本英男（京都国立博物館上席研究員）、末兼俊彦（京都国立博物館研究員）司会：浅見龍介（京都国立博物館企画室長）
参加方法：当日12時より、平成知新館1階グランドロビーにて整理券を配布し、定員になり次第、配布を終了します。定員200名。聴講無料（ただし観覧券等が必要）。

《京都・らくご博物館　冬》

日　時　2016年1月24日（日）午後1時 開場　午後1時30分 開演
会　場　平成知新館　講堂（地下1階）
出　演　桂二葉　桂ちょうば　桂米二　桂よね吉　桂文福
入場料　3100円／キャンパスメンバーズ2500円
（全席指定・平成知新館名品ギャラリー観覧券付）

※チケットご希望の方はお電話、またはWEBよりお申し込みください。
申し込み先：お電話／博物館事業推進係 075-531-7504〈月～金の10～12時・13～17時に受付　＊祝日および12/26～1/3は除く〉WEB／http://www.kyohaku.go.jp　らくご博物館【冬】申し込み画面

これからの展覧会

◆特別展覧会　没後150年 **坂本龍馬** 2016年10月15日（土）～11月27日（日）

国立博物館の展覧会

【東京国立博物館】
特別展「始皇帝と大兵馬俑」　10月27日（火）～2016年2月21日（日）
特別展「生誕150年　黒田清輝―日本近代絵画の巨匠」
2016年3月23日（水）～5月15日（日）

【奈良国立博物館】
特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」12月8日（火）～2016年1月17日（日）
特別陳列「お水取り」　2016年2月6日（土）～3月14日（月）

【九州国立博物館】
特別展「黄金のアフガニスタン　守りぬかれたシルクロードの秘宝」
2016年1月1日（金・祝）～2月14日（日）

◆ 明治古都館休館のお知らせ ◆

京都国立博物館では、今年度より埋蔵文化財発掘調査を行うことになりました。そのため、明治古都館を当分の間休館いたします。これまで平成知新館での「名品ギャラリー」、特別展覧会を開催する「明治古都館」と二つの展示をお楽しみいただいてきました。今後は、明治古都館の休館にともない、平成知新館にて特別展覧会を開催いたします。
特別展覧会の前後には、展示準備等のため、全館休館もしくは名品ギャラリーの部分開館となりますが、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【今後の全館休館および部分開館の予定】
全館休館　12月26日（土）～2016年1月1日（金・祝）
部分開館　12月15日（火）～12月25日（金）
1～2F各展示室（3Fは閉室）
2016年3月15日（火）～3月21日（月・祝）
2F各展示室、1F特別展示室・彫刻展示室
（3F、1F-3～6は閉室）
2016年3月23日（水）～4月10日（日）
庭園および施設の一部（展示室は閉室）

ご利用案内

［開館時間］9：30～17：00
※入館は閉館の30分前まで

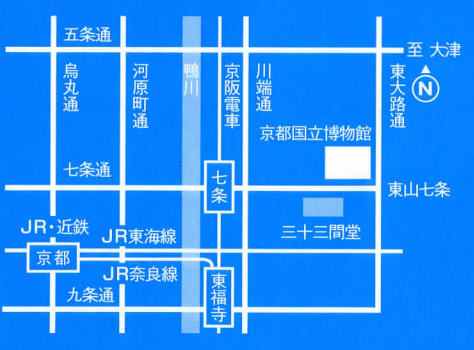
［観覧料］一般520円（410円）大学生260円（210円）
［3月15日～21日］
一般260円（210円）、大学生130円（110円）
［3月23日～4月10日］
一般260円（210円）、大学生130円（110円）
にて庭園をご覧いただけます（庭園ガイド冊子付き、名品ギャラリーはご覧いただけません）。
＊高校生以下および満18歳未満、満70歳以上の方は無料
＊（　）内は団体20名以上

［休館日］月曜日（月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）
12月26日～2016年1月1日

アクセス

JR＝京都駅下車、市バスD2のりばより206・208号系統、D1のりばより100号系統にて博物館・三十三間堂前下車すぐ
プリンセスラインバス京都駅八条口のりばより京都女子大学前行にて東山七条下車、徒歩1分
近鉄電車＝丹波橋駅下車、京阪電車丹波橋駅から出町柳方面行にて七条駅下車、東へ徒歩7分
京阪電車＝七条駅下車、東へ徒歩7分
阪急電車＝河原町駅下車、京阪電車祇園四条駅から大阪方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩7分
駐車場は有料となっております。ご来館の際は、なるべく公共交通機関をご利用ください。

＊「博物館だより」を郵送ご希望の方は、返信用封筒（角2封筒は120円、長3封筒は92円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館企画室までお申し込みください。



〒605-0931　京都市東山区茶屋町527
TEL. 075-525-2473（テレホンサービス）
ホームページ http://www.kyohaku.go.jp/

発行日　2016年1月1日　デザイン　谷なつ子
編集・発行　京都国立博物館　印刷　野崎印刷紙業株式会社

京都国立博物館
KYOTO NATIONAL MUSEUM